

徳川家茂の上洛

郷土史家 西羽 晃

東海道の「七里の渡し」は宮（熱田）と桑名の海を船で渡ったが、ここは木曾・長良・揖斐の上流から砂が流れ込むので、常に砂浚えをしなければならなかった。しかし、幕末になると幕府の力も衰えてきて、砂浚えが十分にできなくなっていた。また「七里の渡し」は天候によって船が出なくて予定を急に変更することもあるので、大行列の場合は安全を見込んで、熱田から陸の佐屋街道を通ることが多くなった。しかし佐屋湊は浅くなっているので、下流の川平が湊として使われようになってきた。

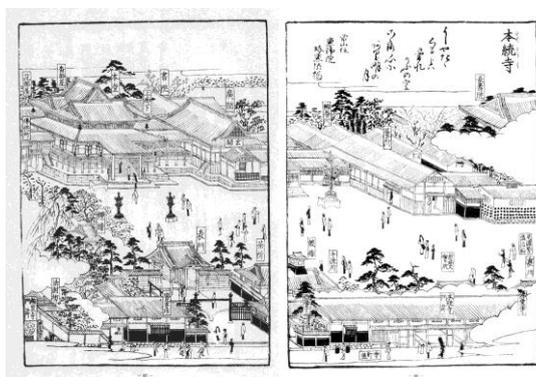
将軍徳川家茂上洛の先発隊として文久2（1861）年12月15日に徳川慶喜は江戸を出発し、12月25日に佐屋から川平を通して桑名へ来た。家茂は文久3年2月13日に江戸を出発して、東海道を京都へ上った。将軍家光が寛永11（1634）年に上洛して以来、238年ぶりの将軍上洛である。

佐屋では文久3年2月15日ころから、連日にわたり荷物の運搬や護衛の人々の行列が続いた。家茂は2月28日に熱田を出発し、岩塚宿・神守宿で休憩して、佐屋宿で昼休みとなり、午後は1里ほど下流の川平まで行き、そこから船に乗り、夕方に桑名へ着いた。当日だけで使用された船は1,101隻になった。将軍や側近の役人たちには尾張藩から特別な船が提供されたが、その他の船は各地から集められた。

桑名城下では川口の船着場、三崎御門、京町御門、鍛冶町御門、七曲御門や桑名藩領境の羽津村などに藩士が詰めて厳重な警備体制がとられた。

家茂は桑名では寺町の本統寺に泊った。普通は各宿場で本陣宿に泊るのだが、

桑名最大の本陣宿である大塚本陣は安政の大地震で痛んでいたようだ。老中の水野和泉守は太一丸の山田屋敷に、老中の板倉周防守は大塚本陣に、若年寄の田沼玄番頭は丹羽本陣に、若年寄の稲葉兵部少輔は脇本陣駿河屋に泊った。この日に何人が桑名で泊ったか不明だが、2,000人ほどとも言われる。それだけの大人数が泊るとなると、寺や大きな民家も総動員だったと思われるし、食事や蒲団、草鞋の準備も大変だったことであろう。



本統寺（『久波奈名所図絵』より）

29日朝は土砂降りとなったが、桑名を出発した。桑名藩の武士たちは麻上下を着て、雨に濡れながら土下座をして見送った。沿道の家では二階の戸を締め切り、紙で封をした。人々は家の中で土下座して見送った。家並みのないところでは、街道から少し離れたところで、子どもを前に、大人は後ろにして土下座して見送った。途中で小向村の庄屋宅と東富田村で休憩し、昼過ぎに四日市宿に到着して宿泊した。関宿を通過した際の見聞では將軍の駕籠が通り過ぎたと思って頭を上げたら、また同じような駕籠が通り、さらにまた同じよう駕籠が通ったという話が伝えられている。影武者が2人いたようだ。

3月1日には殿（しんがり）を務める水戸藩主が3,000人を連れて、桑名に泊った。翌日は朝から晩まで通行の行列は切れ目なく続いた。